

子に気になることがあれば十分に話し合い、必要に応じて小グループ活動への参加をすすめます。

「入園前、小グループ活動に対して周りの子どもから隔てるようなイメージをもつかたもいます。しか

し、子どもによってはゆっくりと気持ちや伝え合う小グループ活動の体験が必要であることを、何日か遊びにきてもらいながら丁寧に説明していくと、大半の保護者のかたは納得されます」（園長先生）

入園後は、送迎時や連絡ノート、父母会などで日々の活動や子どもの育ちを伝えます。話すことが得意ではない子どもの場合、園での様子が伝わりにくいため、特に保護者への丁寧な報告を心がけます。

子どもたちがともに遊ぶ環境をつくる「コーナー活動」

遊びのテーマや環境に配慮し 一体感を演出する

小グループ活動が終わる10時頃から園庭で体操が始まり、特別なニーズをもつ子どももクラスに集まります。体操に参加せず、まわりで見るだけの子どももいますが、「みんなで弁当を食べられるようになってから体操に誘おう」などと、合流のタイミングや接し方が担任の間で共有されています。

体操のあとは、3名の担任がそれぞれ遊びの場を考え、子どもは好きなコーナーで遊びます。遊びの内容は、なるべくどのような子どもでも入りやすいように配慮されています。例えば水遊びが好きで教室を水浸しにする子どもがいれば、屋外で水遊びをするコーナーを設置し、また、ひとりでの砂遊びにこだわる子どもがいれば、砂場の近くにおままごとコーナーを設置します。興味の対象が自分の遊びにしかない場合でも、他の子どもに「〇〇ちゃんから砂をもらおうね」などと声をかけることで子ども同士がかかわる場面をつくります。

工作や泥遊び、動物とのふれ合いなど多様な遊びを用意。別のクラスのコーナーでも遊べるなど、自由な雰囲気重視する。



すべての子どもたちがともに認め合い、生活するうえで何より大切なのは、「保育者がすべての子どもに分け隔てなく自然にかかわること」と、園の先生がたは口をそろえます。例えば、特別なニーズをもつ子どもには、「周囲の子どもと同じことをさせよう」ではなく、「この子どもにとっては何が楽しみなの



か」と、一人ひとりの違いを認めて接します。すると、その気持ちは周囲の子どもに伝わり、自然に相手を受け入れていく雰囲気が生まれます。保育者の働きを通して、子どもたちがお互いの違いを理解し、尊重し合う関係が育まれているのです。

葛飾こどもの園幼稚園



◎1953年、キリスト教の教会に付設された幼稚園。「自由主義保育」を掲げ、子どもが自然にふれ合いながら自分で遊びをつくり出す自由な活動を重視。昭和30年代に開始した林間保育（自然の中でのお泊まり保育）も特色の一つ。

園長 加藤和成先生

所在地 〒124-0012
東京都葛飾区立石2丁目29番6号

園児数 138名（3歳～5歳児）

特別なニーズをもつ子を支える

CASE 2

保育者の「みんなで見守る」姿が 周囲の子どもも育てる

村山中藤保育園「櫻」（東京都・私立）

村山中藤保育園「櫻」では、保育者みんなで一人ひとりの育ちを支えることを大切にしています。特別なニーズをもつ子に関しては、みんなで指導計画を立て、指導方法を共有し、見守ります。そんな姿を見て、まわりの子どもたちも、特別なニーズをもつ子への接し方を自然に学び、思いやりの心をはぐくんでいます。

子どものニーズを的確に把握し、自ら伸びようとする力を支援

自ら育とうとする子どもの力を 支えたい気持ちが出発点

村山中藤保育園「櫻」が、特別なニーズをもつ子どもの支援に本格的に取り組み始めたのは、1983年のことです。当時園長を務めていた高橋保子先生（現・理事長）は、その理由について次のように話します。

「すべての子どもは、自ら育とうとする力を、心や体の中に秘めています。そして、その力を伸ばす手助けをするのが保育者の役割です。しかし、私たちは、特別なニーズをもつ子どもたちに対して、自ら育とうとする力を伸ばすような支援が本当にできているだろうか。そんなふうに悩むことが少なくありませんでした」

子ども自ら育とうとする力を信じて支援するには、子ども一人ひとりのニーズを的確に把握するという作業が欠かせません。

「特別なニーズをもつ子を理解し支えていくには、まず、保育者が子

どもの発達や障害について正しい知識をもつことが必要なのでは？

子どもを育てる立場にいる以上、『知らない』では預かれないはず……私はそう考えたのです」

高橋先生は、まず子どもの発達や障害についての専門的な知識を職員全体で共有することから始めました。また、子どものニーズを正確に把握するため、積極的にセミナーや勉強会に参加して実践例を学んだり、ときには専門家に直接相談に行ったりしました。

「当時は今と比べて、まだ情報が少なかった時代。少しでも知識や指導のヒントを得るために、医師や大学の研究者のところに足繁く通っていました」と、高橋先生は振り返ります。

こうした活動の中から培われてきたのが、外部の専門家との太いパイプです。現在園では、自閉症研究や障害児教育の専門家に来園してもらい、自分たちの子どもの見方や指導のポイントが適切なものかどうか、アドバイスをいただけていま

す。

園では、病院との連携も深めてきました。特別なニーズをもつ子どもが入園してきたときには、保護者の了解を得たうえで、子どもの主治医と面談をすることもあります。医師が子どもの状態をどのように捉えているか、集団生活を過ごすうえでどんなところに気を付けてほしいと考えているかを、面談によってしっかりと把握し、園での保育に生かします。

また、子どもが療育センターなどで訓練を受けている場合も、その施設のスタッフと面談をして、どんな観点で指導や訓練を行っているかについて話を聞いています。



園では、学年単位での活動の時間と、異年齢集団による縦割りの時間を設定。さまざまなニーズをもつ子ども同士が一緒に活動する機会を多く設ける。

保育者同士の横のつながりを強め、みんなで子どもを支える

保育者みんなで1カ月の指導計画を立てる

村山中藤保育園「櫻」では、担任に任せきりにせず、保育者みんなで一人ひとりの子どもの育ちを支えることも大切にしています。

園では月に1回、ME（Medical Education の略）会議を開いています。この会議の目的は、特別なニーズをもつ子ども一人ひとりについて、今どんな部分が気になっているかをみんなで話し合うこと。それまでの1カ月の振り返りと、次月の



担任、担当者が参加するME会議。一人ひとりの子どもの指導計画をじっくりと話し合う。

会議までの1カ月の指導目標や指導方法、配慮しなくてはならないことを指導計画案としてまとめていきます。さらにその内容は、1週間、1日と短期間の計画・目標へと落とし込まれていきます。

毎月の会議に参加するのは園長や副園長、担任、そして、特別なニーズをもつ子を重点的に援助している担当者などです。現在園には特別なニーズをもつ子どもは8名いますが、そのうちの3名に担当者が1対1で付いています。

会議では、担任や担当者が子どもの様子を報告しますが、ほかの保育者からも「園庭でまわりの子とこんなことをして遊んでいたよ」とか、「以前はイヤなことがあると泣いてばかりだったけど、最近は自分の思いを言葉にできるようになったね」といった発言がどんどん出てきます。保育者全員で子どもの育ちを支えようという意識があるため、担当者が一人で抱え込むのではなく、みんなが一緒になって子どもを見ているのです。



副園長 若山望先生



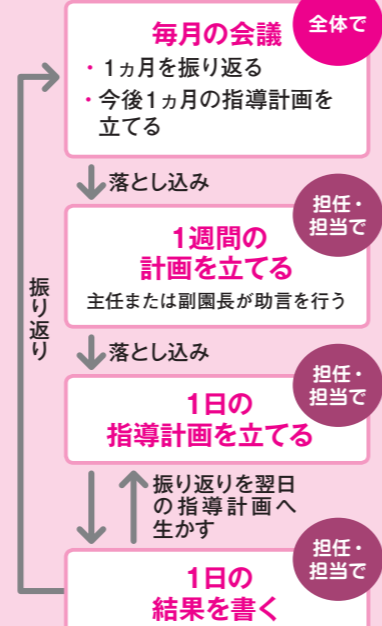
担当者 山口暁子先生



担当者 野口文先生

指導計画の立案の流れ

～小目標への落とし込みと振り返りを重視～



毎月の会議で立てられた月間の指導計画は、週ごとの計画→1日ごとの計画と、落とし込むことで、具体的で、実行しやすい計画になる。定期的に振り返りを行うことで、次の指導計画に生かすことも可能。



生活習慣など、一つひとつの項目ごとに保育を振り返り、次月の計画に生かす。

こうして、複数の保育者による多様な視点から子どもの状態や必要な手立てについて話し合うことで、担任や担当者は、客観的でバランスのとれた計画を立てられます。

今年初めて特別なニーズをもつ子どもを担当する野口文先生は、ほかの保育者と意識を共有できることのメリットをこう説明します。

「例えば、『自分で食事できるようになる』ことを目標にしている子どもがいるとします。ほかの先生がたもその目標を知っていますから、気がついたときは『フォークはこう

自ら伸びる力をサポートするための工夫

◎廊下やトイレの入口の壁には、友だちと仲良く居心地のよい生活を送るためのルールやマナーを表現した写真や絵がたくさん貼られている。言葉だけでは十分に伝わらないことも、ビジュアルを通すと、より子どもに伝わりやすくなる。



やってもった方がいいよ』と子どもに話しかけられます。担任だけでは

見きれないところを、ほかの先生がフォローすることができるのです」

保育者の声かけや対応が、まわりの子どもの思いやりの心を育てる

保育者の言葉のかけ方をまわりの子どもは見ている

専門家とのつながり、保育者同士のつながり以上に、園が大切にしているのが、子ども同士のつながりです。副園長の若山望先生は、「どんなに保育者と子どもの間で信頼関係が築けたとしても、その関係は子どもが卒園すれば終わってしまいます。一番大切なのは子ども同士のつながり。まわりの子どもがその子を理解し、支える関係を築くことができれば、その関係は小学校や中学校でも続きます」と強調します。

そのうえで保育者が配慮しているのが、特別なニーズをもつ子どもへの言葉のかけ方です。周囲の子どもは、保育者が特別なニーズをもつ子どもとどうかかわっているのかわかることで、その子とのかかわり方を学ぶからです。特別なニーズをもつ子を担当して5年目の山口暁子先生は、次のように説明します。「子どもが大きな声を出したと

き、『ダメ!』と叱るのではなく、『〇〇ちゃんは、今こんなイヤなことがあったから大きな声を出しちゃったんだね』と、子どもの気持ちを代弁するようにしています。『ダメ!』と叱ると、まわりの子ども『あの子は大声を出すダメな子』という認識を抱くようになります。気持ちを代弁することで、まわりの子どもも『今、どんな気持ちなのかな?』と、その子の立場に立って考える力が育っていくのです」

現・理事長の高橋先生は、保護者に対して「気になる子どもと一緒にいることで、すべての子どもに思いやりの気持ちが育ちます。いろんな

子どもが共にいることで、一人ひとりが心豊かに育っていきけるのです」とよく話すそうです。自分で靴を履けない子どもがいたら、まわりの子どもがずっと靴箱から靴を取り出して履かせてあげるなど、友だちが困っているときには自然と手助けができる。子どもたちには、そんな心が育っています。

保育者みんなで特別なニーズをもつ子どもを的確に理解し、見守り、そしてその姿を見て、他の子どもたちが思いやりの心をはぐくむ。村山中藤保育園「櫻」が大切にしているのは、人とのつながりの中での育ちです。

村山中藤保育園「櫻」



◎1966年に開園。「人間が人間らしく育つ」ことを保育理念に掲げ、異年齢保育や食育教育などにも力を入れている。園内に子育て支援センターを設置。育児相談や子育て講座などの子育て支援事業にも取り組んでいる。

園長 若山剛先生

所在地 〒208-0003 東京都武蔵村山市中央1-28

園児数 232名